

我喜屋聖化論とウェスレアン聖化論の比較研究

- エリクソン神学の座標軸において -

三年 菅 徹哉

<はじめに>

聖化の問題は私にとって信仰生活の初期からの課題であり、母体団体である一麦の群れ自体がきよめ、聖化を誠実に考える群れであった事と、私自身が一点集中型の傾向が強い事も大きく作用し、福音理解の中心点はいつも聖化理解に集中して言ったと思う。その中で相当悩みつつ、ある時は危機的聖化、全き聖化を信じる立場、ある時はいわゆる「きよめの経験」は無いと考えて漸進的聖化を信じる立場へと、両者の考えの間を行ったり来りしていた。

その様な中で献身するにあたって、この関西聖書学院に導かれた事で我喜屋光雄師が残された文書とメッセージに出会った時、聖化を理解したとか、きよめの経験をした、とか言うのではないが、十年来悩み抜いていた問題を自分のものでありながら。客観的に見る事ができる様にされた様に感じている。この事は私にとって大きな転換点であった。本来であるなら、教派的にはホーリネス、ウェスレアン系統の神学校に行くのが定石のルートであるはずだが、主がこの関西聖書学院に私を導いて下さったのは、我喜屋師を本流として諸先生方から流れてくるところの、私がそれまで持っていなかった聖化理解についての視点を与えようとして下さったと信じて、この導きに心から感謝している。

そこで、私なりに我喜屋師の聖化に対するメッセージから受けた恩恵と示唆を、自分の霊的アイデンティティーのルーツと言えるであろう、ホーリネス、ウェスレアンの聖化理解との比較をもって研究、整理してゆきたいと思う。今回のテーマに取り組むにあたり、我喜屋師に直接ご指導を賜った事のない私がこの様な取り組みをする事は恐れ多いと、躊躇していた私にうながしを与えて下さった大田伯子師、福元玲子師、様々な資料を提供して下さい下さった妹尾潤子師、桜井喜代江姉、適切なご指導を賜った安黒務師、論文の期限を忍耐強く待つて祈って下さった大田裕作師に、同じく祈り支えて下さった箕面福音教会、一麦西宮教会の皆さんに心から感謝を申し上げます。

2003年1月6日最後の学期スタートの日

菅 徹哉

*はじめに

*<序>

***第一章 福音主義神学における聖化の定義**

A.聖化の意味：1.地位的聖化、2.実質的聖化

B.聖化の特徴：1.神ご自身の御業としての聖化、2.その継続性、
3.聖化の目標、4.聖霊の働き、5.神律的相互性

C.第一章結び：「聖化とは何か?」

D.聖化に関する二つの立場：「完全」あるいは「不完全」か?

***第二章「完全」肯定論としてのジョン・ウェスレーの聖化論**

A.その神学：1.「キリスト者の完全」、2.「聖霊のあかし」の教理

B.ウェスレアン聖化論への評価と問題提起：1.評価 2.問題提起

***第三章我喜屋光雄師の聖化論**

A.我喜屋聖化論の輪郭：1.メッセージ、2.神学的位置付け

B.我喜屋聖化論への評価と問題提起：1.評価、2.問題提起

***結論**

1.発見

2.自分の聖化観への影響

*資料、参考文献(各章末にも配置)

*終わりに

< 序 >

今回のメインの研究テーマである我喜屋師の聖化論も、比較対象としているホーリネス、ウェスレ안의聖化論も両者共に宗教改革の伝統である恵みのみ、信仰のみ、聖書のみ原則に立つプロテスタント教会の神学の枠組みに属しているため、両者を比較、考察する前提としてまず、「聖化とは何か？」を福音主義的観点から定義する必要があるが、今回はミラード・J・エリクソンのキリスト教教理入門を下敷きに使用した。

それは、エリクソンの組織神学書が福音主義的神学校の教科書として、世界レベルで採用されているスタンダードである事と、エリクソン自身は穩健カルヴァン主義の立場にあるが、教理を論ずる姿勢の中に自教派的解釈に盲目的に走るのではなくて、他の代表的神学の評価を公平に行い、自陣も含めて客観的に長所、短所、特徴を抽出した上で福音的教会の公同性関わる共通部分を決定した上で、枝葉の理論を派生させていると感じられ、公平さにおいて信頼感があるからである。

以上の理由により、まずエリクソンの聖化論を軸に「聖化とは何か？」を定義してから、ウェスレ안의聖化論、我喜屋師の聖化論を見ていく事にする。